

SIMA (国際農業ビジネスショー) & SIA (パリ国際農業見本市) 前編



最もにぎわっていたのがJohne Deerのブース。大型トラクタ、コンバインに試乗する列に多くの人が並び、グッズもよく売れていた

2月にフランス・パリで開催された農業に関わる2つの展示会に出かけた。SIMA（国際農業ビジネスショー）は75周年、SIA（パリ国際農業見本市）は50周年というともにメモリアルイヤーを迎えた。初めて海外の展示会に出かけた筆者が見た情景を2回に渡ってレポートする。取材・まとめ/加藤祐子



広い会場の一角、レストランの目の前に設けられた肉牛コーナー



ドイツファーレ社の「ランボルギーニ」トラクタとモデルの女性。希少な光景だった

読者の多くはなぜ海外の展示会に足を運ぶのだろうか。実際に出かけてみると、その理由の一端を感じることができた。

最高気温が0℃前後と寒波に見舞われた2月のフランス・パリで農業に関わる2つの展示会が催された。

パリ国際見本市は一般のパリ市民が子供から大人まで多く訪れるイベントである。昨年日本で開催された「農業フロンティア」はこの展示会を参考にしたそうだ。穀物や野菜が種から成長して収穫され、食卓に提供されるまでの一連の流れを多様に展示している。フランス全土や世界各国から集められた物産品が軒を連ねるパビリオンもあれば、牛や豚、ヤギなどの家畜を実際に飼育するパビリオンもある。一日歩いただけでフランス全土の農業や食に関する文化や習慣の多様さを体感できた。

一方、翌日から開催されたSIMAに足を運ぶと、雰囲気は全く異なる。最新の農業機械目当てに農業経営者と思われる人々が会場内を賑わせているからだ。トラクタメーカーも作業機メーカーも買収が進み、一つのブースに複数のブランド名が掲げられている。しかし会場ではフランス語しか通じないエリアが多かった。フランスの農機営業マンに閉塞感を感じたのも良い経験かもしれない。



チャレンジャーのフルクローラトラクタはヘビ柄で登場。この様子はFacebook等でリアルタイムに配信されていた。近くに金属のミニチュアが展示され、多くの来場者がカメラに収めていた



ピエロに扮したスタッフが木製の模型を動かして、技術を体験させてくれる(クラス社)

2年に一度パリで開催される主に農業機械の展示会。40カ国から1700余りの企業が出展し、6つの会場からなる25ha以上の広大な敷地の会場に大型機械がとどころ狭しと展示される。5日間で25万人弱が世界から最新の農機情報を求めて来場した。



クバナランドグループの一角に設けられたクボタヨーロッパのブース。最新の大型トラクタのフロントはヨーロッパ仕様



フランスでは自走式スプレーヤーが多い。キャンピングが上下するタイプも



SIMAアワードを受けた不整地自動車刈機



日本でも認知されつつあるソーシー社のクローラ



毎年開催されるフランスの農業の祭典。全土から物産品や家畜が集められる。子供から大人まで楽しめる



四輪バギーで羊を追いかける実演風景。品評会も別会場で開催されていた



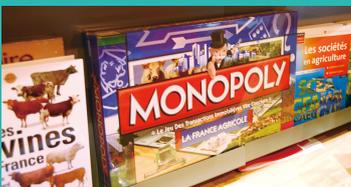
パリ市民にも馴染みのない大型コンバインが会場にお目見え



レストランブースでは大鍋で調理するパフォーマンスも



野菜のディスプレイ。根菜から葉菜まで種類が多い



雑誌売り場で売られていたビジネスゲーム「モノポリ」も農場版!?



ダノン社のブース。乳製品の加工の流れをゲーム感覚で学べる。教えてくれるのは大学生のアルバイトさん。ゲームを終えるとデザートもらえる



S I A S I M A